

妊娠中の梅毒感染症（2023年版）に関する実態調査結果の報告

公益社団法人日本産婦人科医会
会長 石渡 勇
担当幹事 早田 英二郎

2023年に会員の皆様にご協力いただいで実施した妊娠中の梅毒感染に関する実態調査の結果を報告いたします。

1. 実態調査への回答状況

全国2,005の分娩取扱い施設に、2022年1月～2022年12月までの間に分娩となった妊婦の梅毒感染の実態についてアンケートを依頼し、1,346施設（67.1%）から有効回答をいただきました。回答をいただいた分娩取扱い施設の調査機関における分娩数は455,696件で、同期間における我が国の総分娩数の約59%にあたるデータを得ることができました。

2. 実態調査の結果

(1) 我が国で分娩した妊婦における梅毒感染率（表1）

調査期間中に要治療と診断された梅毒感染妊婦は376名であり、若年齢層ほど感染率が高い傾向にありました。妊婦全体の感染率は2016年の同調査の約3倍となっており、どの年齢層においても上昇傾向にありました。

表1. 我が国で分娩した妊婦における梅毒感染率（参考値として2016年調査の調査値を付記）

	分娩数	梅毒感染者数	感染率（2023年）	感染率（2016年）*
19歳以下	3,504	18	1/195	1/537
20～29歳	139,432	238	1/586	1/2,449
30～39歳	245,730	108	1/2,275	1/8,091
40歳以上	28,014	8	1/3,501	1/6,012
全体数**	455,696	376	1/1,212	1/4,022

*:2016年の同調査の値を付記した。**:全体数には年齢不詳の者を含む。

(2) 梅毒感染者の診断時期（図1）

梅毒感染妊婦のうち、80.8%は妊娠初期に診断されていきました。一方で、妊娠中の感染（妊娠初期検査で陰性）が4.8%、未受診や飛び込み分娩等で感染時期が不明であったものが14.4%ありました。

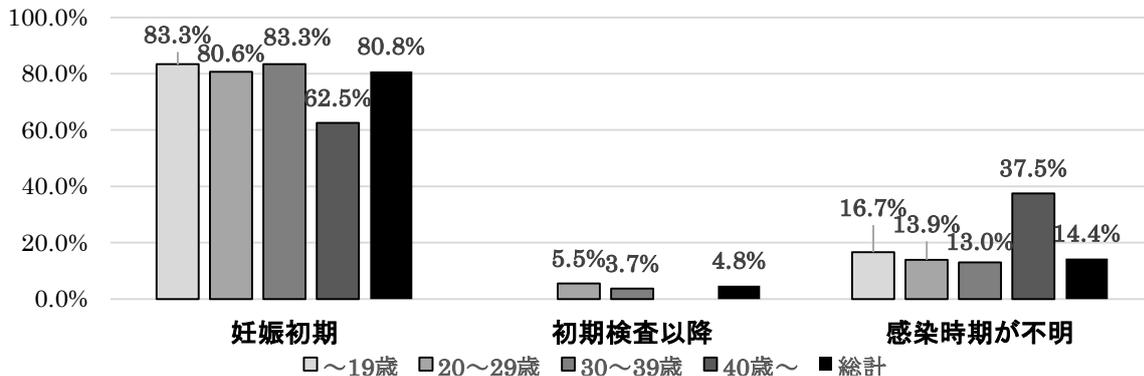


図1. 梅毒感染者の診断時期

(3) 梅毒感染妊婦の周産期予後 (表 2)

2023 年の調査では、梅毒感染妊婦の早産率は 6.1%、死産率 2.1%、出生した児の先天梅毒発症率は 7.4% でした。2016 年調査時と比較して、早産率、死産率はほぼ横ばいであり、先天梅毒児の発生率は半減していました。

表 2. 梅毒感染妊婦の周産期予後

		19 歳以下	20～29 歳	30～39 歳	40 歳～	総計**
2023 年	正期産数	16	188	93	5	303 (80.6%)
	早産数	1	17	3	2	23 (6.1%)
	死産数	0	8	0	0	8 (2.1%)
	予後不明	1	25	12	1	42 (11.2%)
	先天梅毒児数	1	18	9	0	28 (7.4%)
	全体数	18	238	108	8	376 (100%)
2016 年* (参考)	正期産数	7	37	20	3	67 (88.1%)
	早産数	1	4	1	0	6 (7.9%)
	死産数	0	2	1	0	3 (3.9%)
	先天梅毒児数	1	6	3	1	11 (14.5%)
	全体数	8	43	22	3	76 (100%)

*;2016 年の同調査の値を付記した. **;総計には年齢不詳の者を含む.

(4) 梅毒感染妊婦に対する治療法の選択 (複数回答) (図 2)

治療方法は、従来の経口抗菌薬を使用している施設が大多数である一方、2022 年から使用可能となったベンジルペニシリン持続筋注製剤 (ステルイズ®) を使用する施設が 14.3% でみられました。

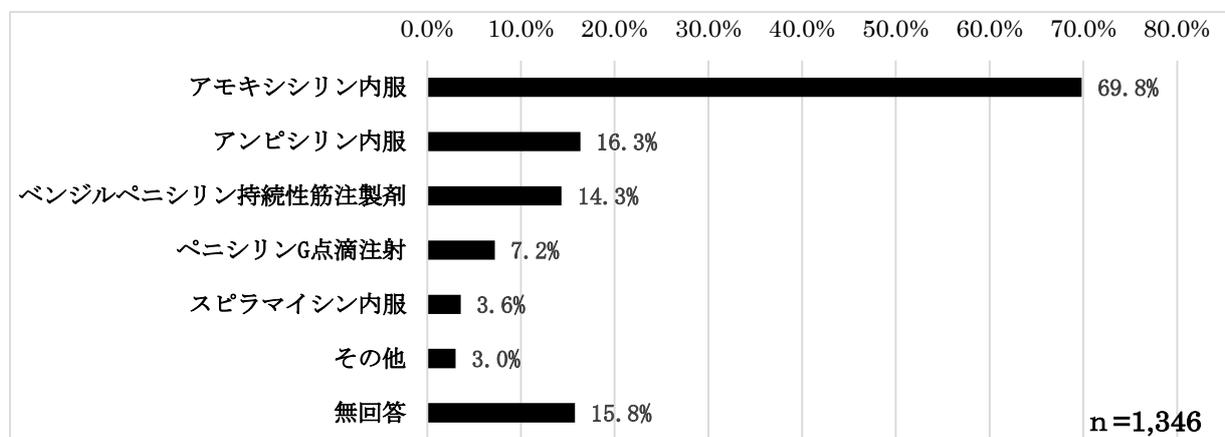


図 2. 梅毒感染妊婦に対する利用法の選択 (複数回答)

3. おわりに

このたび、会員の皆様からいただいた貴重なデータは、「性の健康医学財団」と協力し、母子保健に役立てていく所存です。

日々診療でご多忙のところ、アンケート調査にご協力いただきましたこと、心より厚く御礼申し上げます。